

言語哲学において、単称名の指示の問題は、言語表現と実在との接点が問題となる重要課題とみなされてきた。フレーゲは、単称名の意味論的機能を、指示機能に相当する「意味 (Bedeutung)」と、それを与える「意義 (Sinn)」という二つのアスペクトに分割し、独自の意味論を形成したことで知られている。フレーゲの理論において、意義は、[1] 文の真理条件、[2] 言語表現の認知的重要性、[3] 言語表現の理解の内容、[4] (非外延的文脈における従属節の) 間接的意味、という役割を担う。しかし、指示対象をもたない名前 (空名) ケースでは、そのような名前は意義をもつが意味はもたないとフレーゲは認めなくてはならない。そのため、言語表現から実在への道筋が閉ざされ、真理値の間隙を受け入れざるを得ない。

本論文では、意義の重層構造がフレーゲの意味論に危機をもたらし、空名のケースにおいて顕在化することを示す。そして、現代の言語哲学がフレーゲの発想を継承し、言語表現と実在との意味論的関係をもとに構成されている以上、空名の問題はわれわれの前に立ちはだかる課題とみなされなくてはならない。

そこで、本論文ではフレーゲの発想を生かした枠組みにおいてこの問題を解決することを目指す。そのために、第1章から第3章までは予備的考察として、言語哲学における名前の指示をめぐる議論を検討する。

第1章では、19世紀の哲学者・論理学者ゴットロープ・フレーゲの理論を扱う。フレーゲは、現代では言語哲学の祖とみなされているが、フレーゲ自身の関心は言語についての哲学的理論ではなかった。フレーゲは、数論および解析学を論理学で基礎づける「論理主義」と呼ばれるプログラムに生涯をささげた。論理主義のプログラムを遂行する途上で、フレーゲは文や名前などの概念を明確にする必要を感じ、いわば予備的考察として言語哲学的問題に取り組んだ。その成果が「意義と意味について」をはじめとする一連の論文であり、言語哲学の最重要テキストとみなされている。

フレーゲの言語哲学においてもっとも影響のあったアイディアは、言語表現に〈意味 (Bedeutung)〉と〈意義 (Sinn)〉という2つの意味論的アスペクトを認めることである。フ

レーゲの基本的な考え方は、次のようなものである。言語表現の**意味**とは指示であるが、**意味**は意義によって仲介されることによって、世界のものと対応する。意義は**意味**の与えられ方を規定するものであり、意義を把握することで、われわれは内容の相違を理解し、それを説明することができる。つまり、意義には、言語理解の相関者としての役割と、言語から世界のものごとの通路を付けるものとしての役割を担っているのである。

本論文では、このフレーゲの発想を生かした空名の指示の理論を構築することを目指す。しかし、フレーゲの理論では、空名は現実世界に対応するものごとが見出せないため、意義はもつが、**意味**（指示）はもたないとみなされる。指示対象をもたない言語表現の問題は、言語表現と世界の实在との結びつきが失われるという、フレーゲの言語哲学的枠組みを根幹から揺さぶる深刻な問題であった。さらに、現代の言語哲学がフレーゲ的発想から出発し、言語表現と世界の实在の関係を論じている以上、指示対象をもたない言語表現の問題は、重大な課題としてわれわれの前に立ちふさがる。この問題を解決するために、第1章では、フレーゲ的発想を生かした、デイヴィッド・ルイスの可能世界意味論、テレンス・パーソンズのマイノング主義、ジョン・ペリーの反射的指示説を検討し、フレーゲ的意味論を擁護することを試みる。

第2章と第3章では、フレーゲ以後の言語哲学の背景となる指示の議論を扱う。

第2章では、「現代の日本の首相（the present Prime Ministers of Japan）」や「現代のフランス国王（the present King of France）」のような確定記述（definite description）と呼ばれる表現を論じる。「現代の日本の首相」という確定記述は、ただ一人の人物に当てはまる言語表現である。しかし、「現代のフランス国王」のような確定記述は、現実世界に対応する存在者が見出すことはできない。バートランド・ラッセルは、記述理論という自身の開発した分析方法によって、このような確定記述を分析し、説得的な議論を提示した。ラッセルの記述理論は、「分析哲学のパラダイム」とすら呼ばれ、非常に大きな影響力をもっていた。しかし、ピーター・ストローソンやキース・ドネランは、日常言語において記述を使用する際に、ラッセルの与えた方針ではうまく説明のつかないケースが多数含まれることを示し、言語哲学における確定記述の取り扱いについて再考を促す。このため、ラッセルの分析を、確定記述の問題の完全な解決とみなすわけにはいかず、確定記述を用いたわれわれの発話の場面を含めた理論が必要となる。この確定記述をめぐるラッセル、ストローソン、ドネランの議論を検討し、言語哲学におけるパラダイムが変化していくのを見ていきたい。

第3章では、固有名の指示をめぐる言語哲学の議論を検討する。ラッセルは、確定記述の

分析を固有名にも適用し、固有名は省略された記述であると主張する。このラッセルの主張は記述説と呼ばれ、ジョン・サールのクラスター説によって洗練される。ラッセルとサールに共通の発想は、話者の対象を同定する能力を指示決定のメカニズムと考えることである。彼らの考えでは、ある固有名が指示に成功するのは、話者がその固有名に結び付けている記述が適切に満たされる場合に限る。

しかし、ドネラン、ギーチ、クリプキなどは、話者が固有名に結びつける記述は、指示決定には関与しないと批判し、名前の意味は記述説が考えるように、固有名に結び付けられている記述ではなく、その指示対象に尽きると考える。この主張は、指示の歴史的・因果的説明と呼ばれている。因果的・歴史的説明では、記述説が指示を説明する際に依拠していた話者の対象を同定する能力に代わって、その名前を受け継いできた社会的なネットワーク全体によって対象の同定が担保されていると考える。つまり、固有名の使用は社会的であり、個々の使用者がその名前を使って対象を同定することができないとしても、指示に失敗するわけではない。したがって、話者が固有名に結び付けている記述が指示を決定するのではなく、指示の成功において重要な点は、話者が固有名を受け継いできた因果的・歴史的な連鎖に参加しているという事実なのである。

しかし、因果的・歴史的説明にとって、深刻な問題となるのは、「シャーロック・ホームズ」や「サンタクロース」のような指示対象をもたない空名の問題である。空名は指示対象をもたないため、名前の意味が指示対象に尽きると考える因果的・歴史的説明では、そのような名前を使って、話者がなにを主張しているのかを説明することができない。さらに、因果的に指示対象にさかのぼることはできず、命名儀式によって指示を決定することもできない。この問題を解決するために、第4章ではケンダル・ウォルトンのメイクビリーヴ説を検討する。

第4章は、本論文の中核となる考察が含まれる。まず、第3章で確認した指示の因果的・歴史的説明における最大の課題となる空名の問題を確認する。次にウォルトンのメイクビリーヴ説をやや立ち入って論じ、どのように空名の問題を解決することができるのかを検討する。ウォルトンの理論は、ごっこ遊びという心的態度によって空名の使用を説明するが、異なる話者が大きく異なる解釈ごっこ遊びの内側において同一の空名を使用して指示を行う場合、虚構的共指示 (fictional coreference) をうまく説明できないという問題がある。この言語哲学的構成の不備を Pautz 2008 の議論を通じて指摘する。

第5章と第6章は、ウォルトンの理論を補強するための理論的枠組みを検討する。その

候補となるのが、最新の言語哲学の議論であるファイル・フレームワークである。

第5章は、フランスの言語哲学者フランソワ・レカナティが提唱する心的ファイル・フレームワークを検討する。心的ファイルとは、特定の対象に関する情報をひとまとめにしておくために用いられるものであり、固有名の理解は、その音声によってしるし付けられたファイルと話し手がそこに収めている情報からなる。心的ファイルは単称名辞のように対象を直接的に指示するのではなく、そのファイルを制作する際に主体と対象の間の認知的関係によって個別化されたフレーゲ的意義に相当する役割を果たす。レカナティの理論のもっとも顕著な特徴は、世界内の対象を他者がどのように思考するのかを表象する、メタ表象的機能 (metarepresentational function) を担う指標付きファイル (indexed file) をフレームワークに組み込む点にある。この指標付きファイルによって、空名がどのように使用されるのかを理解することができるとレカナティは説明する。

第6章は、第1章でフレーゲ的発想にもとづく空名の問題の解決として検討したジョン・ペリーの反射的指示理論を検討する。ペリーは、言語の使用とその理解という狭義の言語哲学の枠組みを越えて、対象との遭遇という知覚の場面にまでさかのぼり、言語使用の全貌を描き出す。ペリーの理論は、知覚などの対象とのなんらかの関係によって獲得した情報（「概念 (notions)」と呼ばれる）を、主体がファイルに格納するという点ではレカナティのものと同一である。しかし、ペリーとレカナティの相違点は、ペリーが以下の2つを提案することにある。ひとつは、発話の「指示的内容 (referential content)」と「反射的内容 (reflexive content)」を区別することである。もうひとつは、名前の使用のネットワークを、名前の「起源 (origin)」と使用者の「概念」という道具立てによる受け渡しモデルによって説明することである。つまり、レカナティがファイル化システムを主体の認知的アスペクトと心的作用から説明するのに対し、ペリーはファイルの間主観的な社会性ないし公共性を強調する。このため、レカナティが「心理化されたフレーゲ主義」と呼びうるのに対し、ペリーは「社会化されたフレーゲ主義」と呼びうる性格をもつ。

レカナティとペリーのフレームワークは、このように一見したところ、非常に類似しているが、その基本的発想は異なる。これは、フレーゲの意義をレカナティが言語表現の認知的重要性や理解のための条件という新フレーゲ主義的側面を強調するのに対し、ペリーが社会的・公共的側面を強調するために生じる相違である。本論文では、フレーゲの意味論を二つの方向に展開する両者を比較検討し、ウォルトンの理論を支えるための理論的フレームワークたりうるかどうかを吟味する。

これらの議論を通じて、結論では、ウォルトンのメイクビリーヴという概念の社会性を検討する。そのために、ジョン・サールやライモ・トゥオメラによって論じられている共同性の哲学の観点から、ウォルトンの理論を分析する。この分析によって、ウォルトンのごっこ遊び概念の共同行為的側面を明らかにすることができる。そして、ごっこ遊びの中で、虚構は社会的事実 (social fact) として成り立つということを示す。

本論文は、空名の指示の理論は、言語表現と指示対象の意味論的關係によって汲みつくされるものではなく、発話や談話の理解という語用論的場面のみならず、社会的に保持されている空名についての言説にまでさかのぼらなくてはならないと主張する。「われわれは空名を使用してなにをしているのか」という問題は、狭義の〈言語哲学〉の問題ではなく、主体の共同性・社会性の視座を含む、より広い哲学的パースペクティブのもとで論じられなくてはならないということが示せれば、本論文の目的は果たされる。